

雨とさくらんぼ

南アルプス市内各地では、
 5月下旬ごろから
 さくらんぼの真っ赤な実が
 太陽の光を浴びて

あちらこちらでピカピカと
 宝石のようにかがやきます。

そんな大事な実を、
 雨から守ってきた、先輩方
 の話を伺ってきました。



「コーボシ」と呼ばれていて、「降雨防止」が詠ったものと考えられています。
 このような対策は、全国でもいち早く取り組んだのが白根地区と考えられます。

南アルプス市のさくらんぼ栽培は100年以上の歴史があります。さくらんぼの生産量で山形、北海道に次いで3位の山梨県内においても、南アルプス市はその先駆をなしました。明治30年代には苗木の植え付けがはじまり、大正初期に、山形と福島より高砂とナポレオン種の苗木を貨車2両分(600本といわれる)買い、白根地区西野に移植したのが、本格的なさくらんぼ栽培のはじまりと言われます。早くも大正12年頃には西野は生食用のサクランボの産地として名を馳せるようになり、日本における栽培最南端地として山形産より2週間早く出荷でき、首都圏への流通で地の利を生かした販売戦略が功を奏してきました。一方、生産高一位の山形県産サクランボは、明治時代から昭和40年代まで缶詰用の生産が主流だったようです。

サクランボの実は雨に弱く、雨粒にあたるとタマワレなどして傷むので、実が色づきはじめるところになると、降雨からサクランボの実を守るため、栽培農家はその設備を工夫し、開発してきました。

山梨県果実連史によると、昭和40年頃、「雨除けテント」なるものが出現しはじめます。このテントは樹ごとに巻き上げ式の三角屋根を設置したもので、手動のため、雨が降り始めると急いで駆け付け、木の上に開きました。聞き取り調査によると、昭和40年代半ば頃には、雨が降ると、黄色い雨除けテントがサ

クランボ畑に林立し、「初夏を告げる西野のテント村」などよく新聞などで紹介されたそうです。

しかし、降雨に応じてテントを開閉する作業は大変なことで、「庭に鉄板を置いておいて、『ポトン』と一粒でも雨の落ちる音がしたら、急いで畑に走って三角屋根を広げに飛びだしたものだ」という話を聞きました。家屋内で家事をしながら、寝ている夜中でも、サクランボの収穫時は気が抜けなかったそうです。

昭和50年代半ば、西野で、加温用のビニールハウスの骨組みを利用した、新しいサクランボの栽培設備が整えられはじめました。加温はしないものの、屋根があることで降雨対策を容易にし、さらにサイドをネットで覆って鳥害を防ぐことで、木になつた実を無駄にすることなく最大限に商品化する設備「サイドレス」。白根地区内に次々と建設され、瞬く間に周辺地域に広がりを見せたのです。

もう開くことは無いかもしれませんが、今でも市内各地の畑に雨よけテントの姿を見ることが出来ます。この風景には、先人たちのサクランボ栽培の知恵と努力の物語が詰まっているのです。



雨除けテントとサイドレス